

みた。二人共返事がない。「あれ」と思って両戦友の側にはっていき、顔をのぞき見ると、よく眠っているようだ。身体にさわってみたが反応がない。手足も冷たくなっていった。呼べども口は開かない。

私は吃驚仰天、大声をだしソ連兵を呼んだ。はいってきたソ連兵は一目みて二人は死亡していると判断、同僚と伊藤君、鎌田古年兵を担架に乗せて運んでいった。

私は茫然失神状態になった。運命とは何と非情なものか。情けないまことに憐れな死の惜別であった。生きていると云う心地がまったくなくなってしまった。

明日は我が身が同じ運命をたどるかと思うと、物凄く寂しさに襲われ、その日は悲しくて便所に行くだけで、外套を頭からすっぽり蒙って、一人さびしく物思いにふけた。

夕方になり、明日もまた幾人かの戦友が、或いは自分が死んでいくのかと思うと、不安で不安でたまらなかつたが、いつしか眠りについた。

試験により祖国に帰る

千葉県 関 口 善一郎

ソ連抑留の一断片

私の四年余りの抑留生活で最後の「ラーゲル」は昭和二十四年八月ごろで、特殊混成集団の収容所であった。

入所して幾日もすぎないある日、突然ソ連軍思想部員と思われる軍人の指示により、試験をするという指示により教室らしき一室にはいった。抑留者の同胞達は緊張しきつた雰囲気で受験態度も真剣そのものであったことを、四十年余経過した今でも、その光景を忘れることなく記憶している。

やがてアクチーブ、思想教育指導者ソ連軍人の監視のもとに試験用紙が配布された。内容的には具体的出題項目については忘れたが、概要は抑留中各ラーゲルで学習してきたマルクス・レーニン主義、エンゲルス、史的唯物論、ソ連共産党史等の理解力をためすものの単語、文

章的な内容は「ソ連の第一次革命の失敗要因」「トロキストの存在」「ポリシイビエキの斗い」「農民と労働者の日和見主義」等、共産主義社会への課程で必要な思想上の専門用語等が主なものであったように思う。私はわかった問題から記入したが、さほどむずかしいとは思わなかった。一応解答し、再点検して補正、補足した部分もあったが、所要時間は半日ぐらいではなかったかと思う。

答案用紙がアクチーブによって集められたのち、試験合格者は誓約書に署名することになる。そして誓約書を代表がハバロフスクから飛行機でクレムリンに持参し、帰国となるのが告げられ、試験は終わった。外に出て、私より古年兵らしい二、三の年配者と話し合っているうち、日本軍隊に入隊前の職業が警察官をしていた者や、軍隊では憲兵、特務機関員等の職務にあった者を対象にしていることがわかった。何回かの試験に落ち、いまだ在所中の者も多数いるとのことであったが、私自身なぜこのような人達と一緒にされたか疑問がとけず、どうなることか不安な気持であった。

やがて夜となり、八時から九時ごろ呼びだしを受け連れられていってみると、六畳間くらいの個室に机を前にソ連軍将校の大尉が真中の椅子にすわり、両脇に銃をかまえた兵士が立っている。瞬間、取りしらべであると思った。深々と礼をした。やがて将校は日本語で姓名を聞いた。私は姓名を答えた。将校との問答は今でも記憶している。机上に広げた満洲国の地図を指し、「あなたはこの部隊にいたでしょう」「はい。私は三月中旬北孫呉の三〇六部隊に現役兵として入隊し、六月下旬頃ハルピンの新設部隊に一個小隊の転属兵として加えられました。その後、ソ連の参戦により関東軍司令部に転勤命令を受け、私達の小隊は八月十五日未明に新京駅に到着しましたが、司令部との合流はできず他部隊に編入させてもらって公主嶺に向かう途中、ソ連兵により武装解除を受けました」「よくわかりました。今日の試験はできましたか。」「はい。一応答は全部書きました。カザフ共和国のラーゲルでは三年余炭坑の仕事の余暇に共産主義の本を配布され学習しました。昨年ナホトカに集結後、他地区の集団に分散し、編成がえされ、冬は伐採、夏はソ

ホーズや煉瓦工場などの仕事に短期間ずつ移動して働きましたので、書物は所持しませんが、夜間或いは休憩中にアキチーブを中心に毎日討論会をしてきましたので、大体試験は出来たと思います。「あなたは収容所或いはどこを移動してきたところはわかりますか」（ソ連邦地図をひろげて）「はい。カザフ共和国では同じ収容所に三年余おりましたので、大体わかりますが、ナホトカ以後の地名や地域はいずれもまったくわかりません」「あなたは天皇の軍隊でソ連のどんな情報を取りましたか」「私は三〇六部隊で三か月ぐらいでしたので、モールス暗号をおぼえたくらいで通信機器の操作も出来ませんので、情報は何もとれませんでした」「そんなことはないでしょう」「いや、本当です。情報をとるところか、通信機の使用すらまったく訓練を受けませんでした」「嘘をつくとシベリア送りになりますよ。それでもいいですか」「はい。本当に嘘ではありません」。将校疑問視しながらも帰らなさいというので、深い礼をして引き揚げた。

翌日試験結果の合格者が収容所内本部前に張りだされ

た。私の姓名が掲がいされている。これで一日千秋の思いで待ちに待ったダモイが決まったが、本当に帰してもらえるのかどうか心配であった。

そしてナホトカ港から昭和二十四年九月二十三日ごろ、舞鶴港に祖国の土を踏んだが、抑留中、カザフ共和国での三年余の生活は食糧事情もよく、給料の支給もあり、地方人との作業現場での接渉においても、私達が考えていたような人種の差別もなく、二年目くらいから収容所食堂内にソ連地方人の売店が開設され、ビール、バター、食パン、タバコ等の購入や、外出によるバザールでの物資購入も自由であったことにくらべ、ナホトカ集結後の一年間の越冬により、作業や寒さと飢えによる栄養失調との闘いで九死に一生を得た。また帰国を目前に冬期伐採作業の山小屋で、火事のため一夜にして焼死した十六人の同胞に合掌して冥福を祈り、ソ連抑留の一断片ではあるが、筆をとめる。